

かけはし～レモネードスタンドから考えよう～第65号

6月22日、大阪・関西万博の会場で行われたイベント『ライオンズフェスタ2025～ミライ献血会議～』の中でプレゼン大会が行われ、高校2年生の土井颯太さんが特別賞を受賞されました。土井さんはレモネードスタンドの取組についてプレゼンされました。

まず、レモネードスタンドの紹介から始めます。レモネードスタンドとは、2000年アメリカのアレックス・スコットさん（当時4歳）が自宅前の芝生で、レモネードを1杯50セントで売り始めたのがきっかけで始まった取組です。アレックスさんは1歳の誕生日を迎える2日前に小児がんであることが分かり、脊髄への転移もありました。治療をする中で、同じ病気の子どもたちと出会ったアレックスさんが、小児がんを患う子どもたちのために募金を集めようと始めたのがレモネードスタンドです。2004年6月12日には、アメリカ50州で一斉に開催され、企業の賛同もあり、1日の売り上げと募金額は30万ドルを超えたそうです。アレックスさんはこの年の8月1日にこの世を去られましたが、6月12日は『アレックスのレモネードスタンドデー』とされ、取組は世界に広がりました。日本では2013年にレモネードスタンドジャパンの事務局が東京都に開設されました。



次に土井颯太さんのことを少し紹介します。颯太さんには8年間、病気と闘ってこられた弟の大地さんがおられました。大地さんは5歳の時に小児がんの一種である神経芽腫（しんけいがしゅ）が発症しました。1年間の懸命の治療を乗り越え寛解して退院されました。しかし、3年半後に再発が見つかりました。再発後の治療は確立されていませんでした。颯太さんは高校1年の時、自分が解決したい問題に取り組む授業で、レモネードスタンドのことを調べました。そして、大地さんの「みんなで一緒にやろう」との言葉にも背中を押され、取り組むことを決断されました。そして、初めてのレモネードスタンドを10月14日に計画されたのですが、その5日前の10月9日に大地さんはこの世を去りました。しかし、葬儀翌日の14日には大地さんの幼なじみの方も仲間に加わり予定通りレモネードを販売されました。その後も週末に各地のイベントで出店を続け、売り上げを子どものためのホスピスなどに寄付しておられます。さらにレモネードの販売を通じて『きょうだい児』支援にも取り組んでおられます。難病などの子どもの『きょうだい児』は親がケアに追われるため、孤独感や罪悪感などの悩みを抱えやすいと言われています。実際、颯太さんも「大地はつらい治療をしているのに、自分は楽しく学校に行って友だちたちと遊んでいる」と、罪悪感が募ったそうです。

万博のイベントでプレゼンをしたり、週末にレモネードスタンドを開設したり精力的に活動している颯太さんですが「まだ大地が死んだことの整理がついていない。それでも、活動を続けている限り、大地と一緒にいられる気がする。」と語っておられ、悲しみや大地さんの想いを背負って活動と向き合っておられると感じました。レモネードスタンドにかかわっておられる方には、最愛の子どもさんや大切なきょうだいを小児がんて亡くされた方がおられます。そこにあるレモネードは見た目も味もただのレモネードだと思いますが、きっといろんな方の想いが詰まったレモネードなのだと思います。

人権・地域教育課